

「この夏は一度きりだから」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 「行ってらっしゃい」と「お帰りなさい」がありました

夏休みにしか経験できないことのひとつに海外研修があります。終業式を待ちかねて飛び立ったのがシンガポール組。結団式に参加させてもらった私はこんなことを伝えました。

本校にとってシンガポールとの交流が始まったのは1997年ですから、もう30年近く昔のこととなります。以来、新型インフルエンザやコロナ感染症による中断はあったものの、ここまで脈々と続いてきたのは、交流によって私たち神戸高校が得るものと、相手方ラッフルズインスティテューションが得るものが互いに尊いものであったからに他なりません。

この研修の目的は異文化を理解することやコミュニケーション能力を向上させることはもちろんですが、見慣れない街の色、匂ったことのない街の匂い、空気の肌触り、街の音など、今まで経験したことのないものを五感で感じることです。感じ取れるものが多ければ多いほど、素敵な研修になります。なぜなら、それは皆さん1人ひとりが手に入れる宝物となるからです。

岡田美樹先生とロー先生とともに5泊6日の日程で飛び立った10人のメンバー。帰国の日、私は遠方への出張が入っていたため出迎えることは叶いませんでしたが、引率されたお2人の先生にお聞きすると、「天候にも恵まれ、充実した研修となりました」と笑顔です。手に入れた宝物、ぜひ友達と分け合ってくださいね。



一方、終業式を待つことなく飛び立ったのは英国組。こちらは私の日程の都合が全く合わず、結団式も出国も立ち会うことさえできないまま11日間の日程が過ぎてしまいました。ようやく関わりが持てたのは帰国の際の到着ロビー。出迎えの保護者の方々と談笑しながら今か今かと待ち侘びていると、笑顔満載での「ただいま」となりました。

12人を引率してくださった首藤先生と大和先生にお聞きすると、こちらも天候に恵まれたとのこと。「いい研修になりましたよ」と大和先生は目を細めて話してくれました。ロチェスターグラマースクールでのホームステイはもちろん、ビックベンやバッキンガム宮殿の見学など、得難い経験ができたのでしょう。達成感に満ち満ちた顔が印象的です。

さて、この英国組が帰国した際、時計は既に20時を回っていたのですが、それまでの時間、私は大阪の門真市にいました。水泳の近畿高等学校選手権大会。廣田七海さん出場の日は2日とも出張等で観戦する余裕がなかったのですが、菱川瑛吾くんの200mバタフライ出場の日には時間をつくれたのです。地下鉄を乗り継ぎ、急ぎ会場へ。



惜しくも決勝には進めなかったものの、菱川くんが『神戸高校』の名を背負って泳ぐ最後のレースを井上先生と見届けることができたのは幸せでしたね。くわえて菱川君は後日、応援のお礼を伝えるために、わざわざ校長室まで来て爽やかな笑顔を見せてくれました。そうそう、こういうところに人は魅かれるのですね。

和歌山で開催された近畿大会に出場した卓球部の岩本留依くん、勘舎大珠くんのダブルスは2回戦で惜しくも敗れたものの、大善戦したことを森岡先生が伝えに来てくれます。練習を終えたあと炎天下の地獄坂を登る柔道部員の女子生徒ふたりは笑顔で、「今日も頑張りました」と私に教えてくれます。その傍らをとともに歩く澤田先生も笑顔です。多くのやさしさに見守られながら、この夏が忘れられない夏になりますように。

